平成２３年度版

教職員用

地域を知る

～地域を愛し、地域を生かす教師像をめざして～

For Teachers of Notsuke JHS

～風蓮湖・別海町走古丹の丹頂の親子～

別海町立野付中学校

□野付半島・尾岱沼の歴史と日本・ロシアとの関係

１９６３年に北大探検部によって野付半島の遺跡調査が始まった。その後も根室自然保護研究会の遺跡調査も行われた。竪穴住居は縄文時代以後の擦文・オホーツク文化であったらしいなど野付半島の歴史は今から７，８千年前にさかのぼる。野付半島ばかりでなく尾岱沼地区にも竪穴を残した擦文・オホーツク文化をもった民族の後、アイヌ民族の時代が約５００年間続いたと考えられる。春別や飛雁川には「チャシ」がある。「チャシ」とはアイヌ民族時代の文化の遺跡「砦・城」であり、アイヌ民族が住んでいた、生活していた証である。

当時のアイヌ民族は樺太（サハリン）、大陸、千島列島からアリューシャン列島、カムチャッカ半島などとの交易や漁猟生活をしていた。やがて蝦夷地（北海道）にも和人が本州から移動してくるようになった。道南が和人地となり、アイヌ民族との交易権を松前藩が独占するようになった。厚岸、根室、国後のアイヌ民族もラッコや熊の皮などを持って厚岸に集まり和人との交易が盛んに行われた。しかし、アイヌ民族と和人勢力との争い（コシャマインの戦い、タナカカシの戦い）や松前藩がアイヌ民族向け商品を突然値上げするなどトラブル・戦い（シャクシャインの蜂起）もあった。１７８９年には、国後・目梨アイヌの蜂起により、国後で２２人、目梨で４９人の合計７１人の和人がアイヌ民族によって殺害された。現在、根室市納沙布岬に「七十一人之墓」なる石碑が建立されている。

１７９２年（寛政４年）９月にバラサン沖（本別海に行く途中の別海町茨散）に巨砲数門をつけた１隻の軍艦エカテリーナ号がやってきた。ロシア帝政の使者アダム・ラクスマンの来航であった。日本との通商を求めて日本人漂流者とともに９月２日に突然現れた。ラクスマン一行は幕府との交渉を求めたが、幕府の求めに応じて松前藩と交渉するため海路で函館に向かい、そこから陸路で福山城下に向かった。この件は幕府に通商を断られたが、１８５５年「日露通好条約（日露和親条約)」、１８５８年「日露修好通商条約」締結へと向かう事件であった。１８５５年２月７日「日露通好条約（日露和親条約)」により日露の国境は択捉島とウルップ島の間にひかれ、樺太（サハリン）はこれまで通りの雑居地として日露の正式な国交が始まる。これが北方領土問題の起点となる。１８７５年に「樺太・千島交換条約」が締結され、千島列島は全島が日本領、樺太（サハリン）はロシア領と定められた。１９０４年「日露戦争」勝利後、１９０５年「ポーツマス条約」で南樺太が日本領となるが、第二次世界大戦後の１９５１年「サンフランシスコ条約」で樺太（サハリン）の日本領とウルップ島以北を放棄することとなった。当時、ソ連が「サンフランシスコ条約」の署名を拒否したが、条約内容は１９５６年アメリカ合衆国の公式見解でも明らかにされている。１９５６年「日ソ共同宣言」が署名され、国交の回復が図られたが、北方領土問題については今後も長い時間をかけて交渉の場が持たれることになった。北方領土返還運動は世論の高揚が求められ、現在も根室市納沙布岬「北方館」で全国からの旅行者・来訪者の署名が続けられている。

□野付半島

野付半島は細長い半島で、その長さ約２８ｋｍほどある砂嘴（さし）。規模としては日本最大である。知床半島、国後島、根室半島の三つの地形が、野付半島の形成に少なからず影響を及ぼしている。江戸時代後期には千島列島での交易や漁業の拠点となって栄え、集落「キラク」が存在した。全体的に眺めると、野付湾の特産物「ホッカイシマエビ」を思わせる。近年は、砂の流出が激しく、また、地球温暖化による海水面の上昇の影響で道路近辺まで海面が押し寄せてきている。本校では毎年野付半島で「クリーン作戦」を実施し、ボランティア活動（ゴミ拾い）を行っている。

□打瀬船

野付湾の特産物「ホッカイシマエビ」の漁期（年２回）に見られる真っ白い帆を使って湾を移動する船。青い海にヨットが出現し、白い花を咲かせたような風情を感じさせる。２００５年１１月８日に「ラムサール条約湿地登録」される前年、２００４年１０月２２日に野付半島と共に「北海道遺産」に登録された。夏漁が始まると毎年新聞で紹介される野付湾の風物詩になっている。本校の階段踊り場のレリーフにも描かれている。

□ホッカイシマエビ

野付湾の風物詩となっている打瀬船と共に全国的に知られている高級品野付産「ホッカイシマエビ」。夏漁と秋漁の２回漁期がある。資源の枯渇を防ぐために漁期を制限している。秋漁のエビには卵が詰まっており、特においしいと言われている。煮えび（茹でえび）として地域の店で販売されるが、お店によって味が違う、味に個性があると言われている。エビを今後も獲り続けるため秋漁を取りやめることもある。

□ホタテ

野付漁協の主力となっているのが「ホタテ」である。肉厚で甘みがあり、大きな帆立貝に育つことから「別海ジャンボホタテ」と言われる。地域グルメとして「別海ジャンボホタテバーガー」は道内Ｂ級グルメグランプリを獲得するなど有名である。

□秋サケ（シロザケ）

ホタテと並び野付漁協の主力のひとつになっている。同じ町内では徳川幕府時代に神の湖摩周湖を水源とする西別川で取れた「西別鮭」が献上品として有名であるが、３～４年かけて北太平洋を回遊してきた秋サケ（シロザケ）を産卵のため母なる川（当幌川、春別川、西別川など）に戻るサケを定置網で漁獲する。北海道では「秋味」と呼ぶ。スモークサーモンなど加工品もおいしい。

□尾岱沼の由来

アイヌ語の「砂岬」を意味する「オタ（砂)」「エト（岬)」を和人が「オダイトー」と発音（濁音）し、漢字で「尾（オ）岱（ダイ）沼（トー)」と書かれるようになる。
明治４３年「沿革～別海外五ヶ村戸長役場」では尾岱沼は５０戸２５０人、春別４５戸２２５人との記録がある。現在（平成２３年８月末現在）校区には５３７戸１５７４人が住んでいる。別海町の人口（１６０５４人）に占める割合は９，８％である。

□白鳥台（道の駅おだいとう）

国道２４４号線の春別川河口にあるパーキングエリア。毎年１１月～３月にかけて数千羽のオオハクチョウが飛来し、羽を休める白鳥の観察ポイントとなっている。ここは北方領土返還要求運動の正しい理解と世論高揚のため「北方展望塔」があり、同じ敷地内には老女が息子と孫を従えてすさまじい迫力で北方領土返還を叫ぶ「叫びの像」もある。２０１１年４月１日に「道の駅おだいとう」としてオープンし、旅行者に利用されている。同時に「別海ジャンボホタテバーガー」も味わうことが出来るようになった。

□四角い太陽

野付湾付近で冬の寒い時期（２月頃が多い）に出現する自然現象。気温がマイナス２０度以下で上空が暖かい時に、空気の温度差で起きる蜃気楼の一種。この瞬間を撮影することが、プロ・アマ問わず写真家・写真愛好者にとって夢になっている。毎年多くの写真愛好者がこの時期に尾岱沼を訪れる。白鳥台が絶好の撮影ポイントとして有名である。

□チカの採卵

４月上旬に全校で取り組む「チカ採卵実習」作業。１９６３年に初めて実習作業に参加して、平成２３年度で４９回目になる本校の伝統行事である。朝６時に野付漁協作業場に集合して３～４日間１～２時間程度の作業を続ける。「資源増大のため」「地域の産業を理解するため」をねらいに、毎年２億粒を目標に行っている。教育の原点「師弟同汗」を実践し、１年間の教育活動の潤滑油にもなっている。

□野付半島クリーン作戦

観光地として毎年多くの人が訪れる野付半島。少しでもきれいな半島にするため、また、環境への理解を深めるため、毎年行っている本校の伝統行事である。平成２３年度で３７回目になる。毎年トラック１台分のゴミを収集し、その後は「野付半島ネイチャーセンター」で野鳥の生態などを学んでいる。

□コープの森

環境保全を目的とした植樹活動場所。道の駅「おだいとう」の国道を挟んで反対側に植樹する場所がある。「森と川と海はひとつである」との考え方から、野付湾の海を守ろうとする植樹活動であり、樹木に雨水を蓄え、腐葉土を通して滋養豊かな水をつくり、川を伝わって海の生き物たちの栄養源にしている。本校では毎年１年生がこの植樹作業を行っている。苗木等はコープ（コープさっぽろ）の支援・協力によって、野付漁協が行っている環境保全事業である。

□野付の千島桜

別海町文化財の天然記念物に指定されている。所在地は尾岱沼潮見町２２０番地で、野付小学校敷地内にある。推定樹齢は１００年と言われ、１９０６年ごろ、当時３年生であった子どもたち３名がこの場所に移植し、現在に至っている。毎年、５月中旬から下旬にかけて白や淡紅色の花が開花する。９月頃になると紫黒色の果実をつける。

□トドワラ

立ち枯れたトドマツの残骸が湿原上に立ち残り、特異な風景を形作っている。野付半島の観光スポット。砂嘴上のトドマツ林が海水面の上昇や地盤沈下に伴う侵食により枯死したと考えられる。ほとんどは樹齢１００年前後のトドマツであるが、枯れ木が風化によって消滅しつつある。やがては何もない湿原と化すると思われる。

□ナラワラ

トドワラ同様に海水によって侵食されたミズナラの枯れ木。野付半島を貫く道道９５０号線の途中（トドワラに行く途中)、パーキングエリアから眺めることが出来る。荒涼とした景観を一面に見ることができ、自然の厳しさを感じ取ることができる。野鳥もいっしょに見ることも出来る。

□タンチョウ

ラムサール条約湿地登録されている野付半島や風蓮湖にもタンチョウが姿を見せます。２～３組の夫婦達がやってきます。詳しい情報は野付半島ネイチャーセンターで確認するといいと思います。タンチョウの夫婦は湿原の中に巣をつくっており、メスが卵を抱いて、オスが水辺にきて餌をあさっているようです。

□シマフクロウ

道内には１４０匹程度が生息していると言われ、自然環境が保全されている場所にしか住むことが出来ない絶滅危機にある品種。フィッシュ・オール（ウオミミズク）といい、魚（アメマス、ヤマメ、カラフトマス、シロザケなど）を主に食べているフクロウです。寒冷地を好み、針葉樹や広葉樹が混在する森に生息しています。国後島や択捉島にもいるそうです。全長７０cm、翼を広げると１９０cm 程ある。

□エゾシカ

春先や秋・冬に見られる。朝や夕方に集団で移動することがあり、道路を突然横断することが頻繁であり、特に国道２４３号・２４４号線や道道３６３号線など自動車運転時には注意が必要である。餌である牧草を求め酪農地帯に多くが出現し、近年は頭数が増え、被害も多くなっている。多くの自治体で駆除する方向で対応を図っている。

□東公民館子ども祭り

毎年４月下旬に東公民館主催で「子ども祭り」が開催されている。幼稚園児など小さな子どもを対象にした祭りで、ゲームやわたあめ、アイスクリームなどを食べることが出来る。本校では１年生が参加し、小さな子どもの面倒をみたり、お祭りの運営のお手伝いをしている。

□えび祭り

６月下旬に、夏のえび漁の時期に合わせて行っている地域（町と野付漁協の共催）のお祭り。毎年多くの人が全道各地から尾岱沼に来る。延べ人数は２～３万人にもなり、この地域が様変わりする。有名な演歌歌手などステージ内容も豪華である。本校でも腕相撲大会に参加してステージを盛り上げている。

□野付神社祭典

７月下旬に行われる地域行事。本校生徒の多くが色々な役で神輿行列に参加している。また、男子生徒は相撲大会にも参加している。

□東部スケート大会

地域のスケート協会主催の大会。幼稚園、小学校、中学校それぞれが種目に参加してタイムを争っている。全国中体連スケート大会に出る選手もいる大会であり、地域または地域のスポーツ少年団の活性化を目指している。小学校が事務局として関わっている。

□幼小中交流（幼小連携、小中連携）

地域の子どもの９～１２年間の健やかな育ちを目指した、教員の交流組織。生活面を主とした交流をしてきたが、最近の「小１プロブレム」「中１ギャップ」に対応した連携の必要性が叫ばれ、「幼小連携」「「小中連携」にシフトチェンジした内容に重点を置いた交流を行うことになってきた。

□北方領土学習（北方少年少女塾）

１９４５年８月１５日（終戦の日）以降、ソ連軍はアメリカ軍が進駐していないことを知り、ウルップ島（当時のソ連が領土としていた島）を越えて択捉島以南に上陸を敢行した。８月２８日択捉島、９月１日色丹島、９月２日国後島・多楽島・志発島、９月３日勇留島・水晶島に上陸して、９月５日に北方領土の占領を終了した。島民の一部は危機をおかして北海道に脱出したが、多くの島民は船で樺太（サハリン）に連れていかれ抑留生活を余儀なくされた。その後、日本本土に引き揚げられた。尾岱沼にも元島民（ほとんどが国後島）も多く住んでおり、孫が野付中学校に通っている家庭もある。

「北方四島（歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島）は日本固有の領土である」ことを歴史的な背景を含めて学ぶことが北方領土学習のねらいであり、今後の返還運動など領土問題を考えるきっかけとして大切な学習であると考える。本校では毎年３年生が根室市で開催される「北方少年少女塾」に参加している。「日露通好条約（日露和親条約)」が締結された１８５５年２月７日から「北方領土の日～２月７日」となった。

□水産学習

総合的な学習の時間で行っている本校の地域学習。「チカの採卵実習」の他に、１年生は「アサリ移植作業」、２年生は「サケの採卵実習」、３年生は「ホタテ燻製づくり」を行っている。本校施設には「水産実習室」が備わっており、ここでチカの採卵実習前に１年生向けの事前学習を野付漁協にお願いしている。

□西別岳

標高７９９，８m。国道２４３号線を弟子屈町から虹別方面に向かう途中、養老牛への標識を左折し、「西別岳登山口」の案内板にしたがって進むと山小屋が建つ登山口に着く。（広い駐車場とトイレがある）

「うぐいす谷」「がまん坂」「第一お花畑」「第二お花畑」を過ぎるとリスケ山（標高７８７m）への分岐点。西別岳頂上からは摩周岳（カムイヌプリ標高８５７m）に行くことが出来る。西別岳からは摩周湖を眺めることができる。本校では１年生がこの山を目指して登山を行っている。

□和琴半島湖畔キャンプ場

所在地は釧路管内川上郡弟子屈町字屈斜路和琴半島。屈斜路湖畔に位置し、豊かな緑を背景にじっとたたずんでいるだけで幸せな時間を過ごすことができるキャンプ場。レンタルカヌーやボートで水上散歩を楽しめる。昔は水上バイクの騒音に悩まされたが、規制が厳しくなりキャンプ場では見かけなくなった。繁忙期の７，８月以外はサイトまで車を入れることができるので荷物の搬入・搬出は助かる。本校では２年生が宿泊学習としてここのキャンプ場を利用している。

□野付幼稚園

１９７７年４月開園。別海町にて３～４歳児は保育園、５歳児は幼稚園でという幼児教育の基本的なあり方について検討が進められ、平成１０年「別海町幼児教育復興計画」が策定された。それを踏まえ、「保育園の機能を生かした幼稚園」として再出発することになった。平成１４年８月より平成１５年２月の工期を経て現在地（潮見町２１３番地）に近代的園舎が建設され、平成１５年４月に開園された。今年で３５年目を迎えた。

□野付小学校

明治３３年（１９００年）に春別簡易教育所として認可を受けたことをもって歴史が始まる。今年で１１１年目を迎えた。１９７１年（昭和４６年）に「別海町立野付小学校」に改称。１９８１年（昭和５６年）に現在の新校舎となる。

教育目標「広い心とたくましい体力で未来を創造する児童の育成」を目指し、「学び続ける学校」を経営のテーマとしている。

□野付中学校

昭和２２年（１９４７年）創立、今年で６５年目を迎える。特色ある教育として「水産教育」を実施している。とりわけ「チカの採卵実習」は今年で４９回目となる伝統行事である。教育理念「ふるさとに生きる力を育む」に基づいて、教育目標「精一杯努力し、逞しく生き抜く人間の育成」を目指し、日々「生活を高める」「意欲を高める」「心を高める」教育活動を行っている。

現在の校舎は、昭和６２年（１９８７年）１２月に屋内体育館と一緒に新築・完成した。事業費は校舎　３４１，３２２，０００円、屋内体育館　１９３，７３５，０００円、総事業費は５３５，０５７，０００円であった。

□野付漁業協同組合

年間を通して漁が行われる野付の海は、冬の流氷がもたらすプランクトンによって、ホタテや鮭などの好漁場になっている。漁は野付半島を境に湾内と外海で行われている。資源を守り育て、資源量に対して漁獲量を決める「資源管理型漁業」が実践され、獲る漁業から育てる漁業への転換が図られている。

１９７３年（昭和４８年）の第５次サケ定置漁業権の切り替え時には、従来の漁業者と新たに定置漁業を希望する組合員が漁協を中心に話し合い、多くの組合員がサケ定置漁業に参加することになったという歴史を持っている。野付漁協は「譲りと協同」の精神で運営されている。水揚げはサケとホタテが全体のほぼ９割を占めている。

「海と川と森はひとつ」をスローガンに、コープさっぽろと協力し、大切な海を守るための植樹事業にも継続的に取り組んでいる。本校でもこの「コープの森」植樹に参加している。

□野付漁協女性部

野付漁協に属し、主に社会貢献活動を行っている。部長　平賀由喜子さん、部員１８３名。平成１７年には「コープの森」植樹活動推進により、「北海道社会貢献賞」（森を守り緑に親しむ功労賞）を受賞している。本校では「地産地消」の考えに基づき、郷土料理を家庭科の授業に取り入れており、野付漁協女性部を講師に「サケのちゃんちゃん焼き」「サケのすり身の唐揚げ」「サケのアラ汁」「ホタテの野菜サラダ」を指導してもらっている。

あとがき

今年で６５年目を迎えた野付中学校は、伝統的に日常的な教育活動をする上で地域との関わりを大切にしてきた学校である。今後も同じスタンスで取り組んでいきます。

ここ尾岱沼地域には国後島の元島民も住んでおり、野付湾から臨むことができる国後島の存在もこの事実を受け止めると、深く考えなければならないこともあります。例えば、北方領土問題に関わることであるが、「北方四島は日本固有の領土である」と意識するかしないかの差が保護者・地域との信頼関係に大きく関わることかもしれません。意識することなく国後島を見て「ロシア領が見える」と子どもたちの前で話したらどうなるのでしょうか。

１年間の教育活動を進める上で、地域との関わり・出会いが多く出てきます。地域のことを知らないより知っていることでうまくいくことが多々あると思います。不十分な内容ではありますが、日常の教育活動に直接・間接問わず生かしていただければと思いまとめてみました。

年度当初に追補等「改訂版」として発行する予定です。不十分な点や間違い・訂正部分があればご教示していただければありがたく存じます。

平成２３年９月

校長　　荒　谷　順一郎